

明治期家族制度下における 一進歩的慈善事業家族の価値形成とその考察
ヒューマン・エコロジー研 松田喜美子

目的 明治維新及び動乱の明治期を生き、大正2年父と共に不幸な死を迎えた 進歩的知識・行動人、関寛(蘭医)園生三(近代医)の生涯を通して、日本の近世から近代への時代転換期に、時代の苦悩と、家族の内なる構みに重ぬいた 明治人のもつ価値形成を探究し、今日迄子孫の反目という「家」のもつ影帯を通して、日本人の価値観を追究し今日の家族の危機状況で、未来へ向けてのアプローチを考察する。

方法 1) 文献研究。明治期家族制度関係 2) 実地踏査 3) 面接者
 ・北海道開拓史対勝史、 北海道陸別町 関寛孫(解)園 謙三
 ・陸別史。関寛の人物像 徳島市 (解)園 静吉
 ・四国新聞社人物史 陸別町役場史員
 ・関農場の考察。アイヌ史 白里翁研究者代表

結果 関寛の業績は今日迄町々くりの基本として町民の尊敬の的であり、その長男生三も亦、社会事業の先駆者として、幅広い活動は徳島における社会福祉の鑑ともいわれている。しかし外面的な評価に対し、内なる、家族・親族の、引き裂かれた不和、不信は今日迄「家」のきづなを重み故か、日本人のもつ価値観の二面性の無償か、時代の流れの中で風化し得ない悲劇をもっている。私は24年この研究とかわかって、家族の価値形成の重要さに改めて気づいた。したがって、今日の家族機能が低下している時期に、家族のもつ意義を、「価値形成の責任」について考察し、その未来へのアプローチのあり方を提言する。